

世界を
良い方向に
変えていく

服のチカラ

THE POWER OF CLOTHING

【特集】

シリア難民が
ドイツに暮らし、
ベルリンで働く。

18
SUMMER

ユニ
QLO
Life Wear



BEFORE
シリアの世界遺産が



AFTER
戦闘で破壊された。

シリア最大の都市、アレッポ。紀元前に建てられた世界最古のひとつとされる城や、市場(スーク)が世界遺産に指定されている。シリア内戦が激化した2012年、戦闘により市場は無残に破壊された。
写真上下とも ©ロイター/アフロ

シリア難民が ドイツに暮らし、 ベルリンで働く。

この数年で多数の難民が流入したドイツ。
首都ベルリンのユニクロの店舗では、
現在3名*の難民が働いている。
彼らの日々の暮らしと、その未来。

photographs by
Dahahn Choi for The Bakery



アブドゥラハマーン・アル=ネッサーさんは25歳(通称アブドゥル)。シリア内戦の戦火を逃れて、はるばるドイツにやってきた。

生まれ育ったシリアの首都、ダマスカスを出発したのは2015年9月。戦闘が激化するなか、国内にとどまることを決めた両親に背中を押され、最小限の荷物をリュックにまとめたアブドゥルさんは、自宅をあとにした。

その先で待ちかまえる危険と、寒さと、不安に満ちた苦難の旅については、あとで触れよう。

なんとかドイツにたどり着いたアブドゥルさんは、難民の認定を受け、ドイツ語を学び、就労の許可も得て、ベルリン郊外に家を借りた。そして、ユニクロに履歴書を送り、面接を受け、ベルリンのユニクロ タウエンツィーン店で働きはじめた。

同僚ともすっかり仲良くなった。今も働きながらドイツ語上級クラスを受講し、ドイツの大学で経営学を学ぶことを視野に入れている。

そもそも——と最初に考えておきたいことがある。この数年でドイツは、申請認定待ちも含め、180万人を超えるといわれる難民を受け入れてきた。なぜだろう。

ドイツの憲法にあたる基本法には、難民の

保護が明記されている。その根底には第二次世界大戦に対する歴史認識がある。

さらに、半世紀以上前から始まった外国人労働者受け入れの実績もある。1990年代には旧ユーゴスラビアの難民を多数、受け入れた。そのたびに賛成、反対で国論を二分しつつも、今や人口の5人に1人が移民の背景をもつといわれるドイツにとって、これははじめての試練ではない。

難民の受け入れに反対する人は今もなおいる。難民とは直接かかわりのないテロ事件が起こっても、逆風が吹く。しかし長期的に見れば、ドイツ社会は試行錯誤を重ねつつ、難民の受け入れを一貫して続け、難民とドイツ社会の統合をめざしている、といえるだろう。

少子高齢化のなか、難民の受け入れはドイツ社会の労働人口を支える大事な柱だという見方もある。労働の喜びを分かちあう国こそが、国を豊かにする、という考え方。ドイツは働くことの未来、その持続性を見ずえている。

シリア難民の いま。

難民
A to Z

2015年末、世界では紛争や迫害によって移動を強いられた人の総数が6500万人を突破した。かつてない最悪の事態である。2011年に始まったシリア内戦による難民のうち、国内で避難する人は約630万人、国外に逃れた人は500万人を超えた。その半数は女性と18歳未満の子ども。内戦前、初等教育を受ける子どもの割合はほぼ100パーセントだった。現在では60パーセントを割り込む状況となっている。





アブドウルさんがたどったシリアからドイツへの道。
 シリアのダマスカスからドイツのミュンヘンまでの通称「バルカンルート」の距離は、約3400km。鹿児島市から稚内まで陸路で行っても約2600kmである。ミュンヘン到着後も、アブドウルさんはドイツ国内を転々とするようになった。

兄が届けてくれたリュックサック。その右隣にあるのは極小サイズの函入りコーラン、母が書いてくれた折りの言葉は折りたたんで持った。スマートフォンは情報を得る命綱。腕時計は知らぬ間に壊れて止まってしまった。

上：戦闘で破壊されたシリアの街。レバノン内に逃れる人々。(いずれの写真も©UNHCR)

ドイツをめざしてダマスカスを出たアブドウルさんは、国境を越えてトルコに入り、他の難民とゴムボートでギリシャに渡ろうとした。が、途中でボートが難破。命は助かったが、荷物は海に消え、再びトルコに戻らざるを得なかった。

テッサロニキから先は陸路。バスに揺られてマケドニア、セルビアとふたつの国を縦断した。ハンガリーとの国境の手前で、バスを降りた。

アブドウルさんの兄、ムハンマドさんがあらたなリュックサックをトルコまで持って来てくれた。合流してからは、兄も同行する旅が始まった。

国境を徒歩で越え、夜の森に入ると、窃盗団に襲われそうになった。ハンガリーの警察に見つかれば送還されるという噂もあった。森の上空からサーチライトを照らしてヘリコプターが捜索していた。トウモロコシ畑に逃げ込んで身を隠した。降りつづく雨で全身がずぶ濡れになり、寒さと恐怖に震えながら歩いた。警察犬の吠え声が遠くから聞こえた。結局、難民をひとまとめにする警察に捕らえられた後、バスに乗せられブダペストへ。収容先の古い施設は衛生

定員オーバーの40人以上が詰め込まれたゴムボートで、真夜中にトルコのイズミルを出発。ギリシャのサモス島に着き、そこから6時間歩いて島の反対側の港に向かった。大きな船に乗り換え、ギリシャのテッサロニキへ。

状態が最悪、腐りかけの食べ物も出た。氷のように冷たい床で眠った。やっと解放されると、電車でオーストリアのウィーンへ。

オーストリアの人々が親切に迎えてくれたのが忘れられない。新鮮なジュース、チョコレートの味。歯ブラシと歯磨き粉で歯を磨く。新品の服とリュックサックをもらった。そして電車に乗って5時間。ついに、ドイツのミュンヘンに到着。「ようこそ!」の声に迎えられた。スマートフォンのSIMカードをもらい、シリアの母に電話をした。もう安全だと感じた。新しい人生が、ここから始まる、と思った。

難民
A to Z

「バルカンルート」閉鎖後の現在。

シリアからトルコ、ギリシャへと移動し、バルカン半島を経由してヨーロッパをめざす「バルカンルート」は、アブドウルさんが通過した約半年後の2016年3月、欧州連合(EU)がトルコに留まる難民支援を約束することによって、事実上閉鎖された。しかし、今なお逃げてくる人々のギリシャへの流入は続いている。難民申請の受付とその審査作業にも時間がかかる中、滞留時の衛生、健康状態が懸念されている。



アブドゥルさんは本格的なドイツ語の習得のため、NGO「システム・データ」が運営する無料のドイツ語教室に2016年10月から通い始めた。今も上級クラスで学んでいる。ここではドイツの歴史、文化、伝統、地域による特色も学ぶことができる。



2015年9月15日、ミュンヘンに着いたアブドゥルさんは、その日のうちにポーランドとの国境に隣接するアイゼンヒュッテルシュタットへ移された。新品の服を一式もらい、底冷えのするテントのベッドで眠った。ドイツ語の基本会話のレッスンが始まったのは、2日後のことだった。

次の施設はベルリン郊外のフルステンベルク。立派な建物の大部屋に2段ベッドが3つ。勉強机もあり、こまめに清掃に来てくれた。お湯が使え、シャワーやトイレも清潔。快適だった。

しかし4ヶ月のあいだ、展望のない日々が続いた。ダマスカスを出て、はじめて感じた退屈。

ドイツ語の授業は、最初の月は週に1回。2ヶ月目から週に2回、3ヶ月目には毎日となった。ドイツ語の例文や教師の説明で、ドイツ人の習慣——時間の約束はしっかり守る——や、考え方の違いを学んだ。公民館やドイツ人の家庭に招かれ、親睦パーティが開かれた。親切な人が多い。でも、自分たちを誤解している人もいと知った。

外出は自由だったので、ドイツ滞在の長い友人に連れられてベルリンに行った。電車の乗り方や時刻表の読み方を覚えた。施設から駅まで25分ほど歩き、特急に乗れば1時間だった。

ベルリン市内のアラブ人街にも行った。レストランや駅でタバコを吸ってはいけなく、横断歩道の信号は守る、こちらから口論をしかけない——10年以上住んでいる人から教えられた。

次に移ったレーニッツの施設では食費付きの自炊生活。料理などしたことがなかったから、シリアにいる母や叔母に電話をしてレシピを聞いた。

難民に家を貸すドイツ人ホストファミリーを紹介され、フルステンベルクの小さな家を借りて、兄とのふたり暮らしが始まった。ベルリンのドイツ語学校にも毎日通い、夫人も個人レッスンをしてくれた。ドイツ語字幕付きのDVDも繰り返し見た。ご主人のドイツ語が少しずつわかるようになっていった。

夫妻はアパート探し、契約の相談、契約の立会いにも協力してくれた。こうして、いま住むベルリン郊外のテラスハウスでの暮らしが始まった。

難民
A to Z

難民への教育プログラム。

難民の緊急保護からドイツ語教育、そして就業支援までを行うベルリンのNGO「ベルリナー・スタッドミッション」(「ベルリン市の使命」の意)によれば、難民への対応の三本柱は「語学教育、友人関係の構築、統合」だという。コミュニケーションには語学力が必須、ドイツ人と触れあい、お互いを知って、友人関係を結ぶことも重要。最終目標はドイツ社会との統合。EUの思想と土台は同じだ。



ユニクロドイツ事業で難民支援を担当、NGOなどと連携して難民雇用を進めるマリアさんと。

お世話になったフルステンベルクの夫妻に、シリアではどんな仕事をしていたのか、ドイツでは何をしたいか、と聞かれた。マタニティウェアの店を任されていたと話すと、娘がベルリンのユニクロで働いているよ、と言われ関心をもった。

ユニクロのヒートテックのインナーウェアを夫妻の娘からプレゼントされた。着るだけで暖かく、気持ちいい。日本のテクノロジーでこんな服ができるのかと驚いて、今度は自分でベルリンの店に行き、ウルトラライトダウンジャケットを買ってみた。薄くて軽くてかっこいい。すごく暖かい。ますますここで働いてみたいと思うようになった。

ドイツ語の教室に通いつづけ、複雑な仕事が

できる語学レベルのB1の試験にも合格した。夫妻に相談し、ユニクロに職務経歴書と履歴書を送った。面接を受けたとき、面接官はみな笑顔で対応してくれ優しかった。念願の採用が決まった。ドイツにやって来てから、9ヶ月が経っていた。

ドイツ語の勉強が進まず、望むような仕事に就くことのできない人、内戦で心的外傷を受け立ち直れない人、家族と離れたままの人……ドイツで暮らしながら悩んでいる人が少なくないなかで、自分に与えられた幸運に深く感謝した。

働きはじめの頃、不安もあった。商品の知識をきちんとしたドイツ語で伝えられるだろうか。忘



ユニクロ タウンズマン店のメンズフロアがアブドゥルさんの担当。接客では、微笑みを忘れない。

れられない大失敗もした。お客様の買ったチノパンツの裾あげで、もう一本、デザインも着こなしも違うパンツの裾あげを単純に同じ長さで縫ってしまった。

働いてわかったのは、ドイツが母国とは限らないスタッフがたくさんいること。身体に障がいのあるスタッフも生き生きと働いていること。各フロアでチームができていて、助けあったり連携プレーをしながら、とても仲がいいこと。

いま働いている店はヨーロッパで売り場面積が最大の旗艦店だ。そう簡単にはいかないだろうが、ゆくゆくはフロアマネージャーになって、最終的にはユニクロの店長になりたいと思っている。

難民の就業支援の現状と課題。

難民
A to Z

NGO「ベルリナー・スタッドミッション」は、就業支援のため、職業別国家資格取得のガイダンス、履歴書の書き方、入社のための面接対策をレクチャーし、個人相談にも力を入れている。たとえ気に入っていても、面接官はニコリともしないのが普通、といったことまで伝え、難民の不安をやわらげる。しかし企業によっては、国籍や中東諸国系の名前だけで、書類選考段階で落とす場合があるという。



ベルリン郊外にある、アブドゥルさん兄弟の家。鶏肉と野菜をたっぷりつけたマカロニ料理をつくってくれた。



ベルリンから電車で1時間半の郊外にある、アブドゥルさんとお兄さんの住む家を訪ねた。

小川の流れる自然豊かな街をしばらく歩くと、裏庭つきのテラスハウスに着く。玄関で靴を脱いで入る。掃除の行き届いた明るい家。庭向きの窓から、鳥の鳴き声が聞こえる。

ユニットキッチンを設置し、家電製品や家具を揃えるにはお金がかかったが、政府の補助金が少し出て、家具の多くは中古品を譲り受けた。

シリア内戦の話を、兄弟ふたりに聞いた。

2010年にチュニジアで始まった民主化要求の反政府運動は、リビア、エジプトとつぎつぎに飛び火し、やがてシリアにも及んだ。

兄弟の住む首都ダマスカスは、政権のお膝元だから、アレppoのように激しい爆撃を受け、多数の死傷者が出ることはなかった。絶対的な独裁政治でやってきたのがシリアという国であり、デモによって何かを根本から変えることなどできない——兄弟は当初、運動を批判的な目で見ていた。

しかし100人程度だったデモ隊が日ごとに人数を増やし、郊外では武力衝突も起こるようになった。2014年には街の壁に「自由」と書いた10代の子どもたちが地方都市で捕らえられ、爪をはがされるなど虐待を受けた。反政府勢力の膨張にしたがって、デモを鎮圧する程度だった政府側の動きが軍事力の行使へとエスカレートしていくのを見るうち、兄弟の気持ちは大きく変

化した。

やがて、ダマスカス郊外でも激しい空爆が起こるようになった。兄弟の住む家の周囲は空爆を免れていたものの、一般人にも危険が差し迫っていることを肌で感じ、出国を決意した。

自分たちをこうして受け入れてくれたドイツで、自由とは何かをはじめて体感した。シリアにはもう二度と帰ることはできないだろう。

兄弟に夕食をふるまってもらった帰途、最寄りの駅まで一緒に歩いた。駅の通路の白いタイルの壁に、黒い文字の小さな落書きを見つけた。「REFUGEES WELCOME」(難民のみなさん、ようこそ)

難民
A to Z

ユニクロの難民雇用のこれから。

ユニクロドイツ事業での難民雇用は、まだ始まったばかり。しかし難民の採用が、スタッフ同士のチームプレーの質を向上させ、顧客＝地域住民とのささやかな交流の機会にもなった、と手応えを感じている。ユニクロ タウエンツィーン店では、各フロアでの難民スタッフの配置を計画中。難民雇用への取り組みは、日本、ドイツのみならず、世界各地のユニクロでも少しずつ広げていきたい、と考えている。

服の会社だからできる 3つのこと。

難民の支援で、何ができるのか。
私たちユニクロが始めたのは、服を届けること、
自立して働くお手伝いをする、ともに働くこと——。



日本から服を持ってきました。
是非着ていただけたらうれしいです。



◀動画はここから
<https://www.youtube.com/watch?v=bqJlyHopf0g>

2 働くことへの お手伝い……自立支援

難民には自分で生活を営んでいくための自立支援が必要です。たとえば、縫製や刺繍技術の取得を支援することで、働くことへの意欲も生まれてきます。2016年からUNHCRに3年間で1000万ドルの支援を開始。うち550万ドルが自立支援プログラムに活用されます。



©Natsuki Yasuda/studioAFERMOE



◀詳しくはここから
<https://www.uniqlo.com/jp/sustainability/refugees/independent/>



◀詳しくはここから
<https://www.uniqlo.com/jp/sustainability/refugees/internship/>

3 ともに働こう……難民雇用

ユニクロ店舗で難民に就労の場を提供することで、自立を支援する取り組みを行っています。2011年に開始して以来、様々な難民支援団体と連携して、受け入れ人数の拡大を図るとともに、雇用後のサポートにも注力しています。まずは、100名の採用を目標にし、現在45名(2017年5月15日現在)が活躍しています。

難民とともに暮らし、働く。 難民の未来は、私たちの未来。

自分の生まれ育った街が戦闘で破壊され、住むことができなくなったとしたら。安全に暮らし、働くことのできる場所が、何千キロと離れた見知らぬ国だとしても、そこをめざすしかない——理由や背景は様々であっても、自分の国をあとにすることの不安は、誰にでも想像のできることではないでしょうか。

やっとたどり着いた国が安全でも、その国の言葉をまったく知らないとしたら、どうでしょう。耳で聞いても、彼らが何を言っているのかわからない。自分の気持ちや切実な状況を、言葉にして伝えることができなければ、その不安は、自分のまわりにぐるりと高い壁が立ちふさがって、向こう側が見えないようなものでしょう。

言葉だけではありません。その国では当たり前になっている習慣や文化を知らないままでは、ちょっとしたふるまいで、その国の人々を戸惑わせるかもしれません。誤解したり、怒りだしたりする人が、いないともかぎりません。国境を越えるだけで、ちょっとしたしぐさや表情の意味合いが、変わってしまうこともあるのです。

一方で、いま世界は、経済も、社会も、文化も、お互いに共有し、交換しあい、つながることで成り立っています。グローバルな世界にとって、何千キロと離れた国での紛争や迫害は無縁の出来事ではなく、世界の持続可能性に負のインパクトを与えかねません。自分の生まれ育った街を離れざるを得ない人々は、私たちと無縁ではない隣人なのです。

いま全世界で、6500万人を超える難民・避難民などがある状況に、どのような貢献ができるのか。私たちユニクロは「服の会社にできることは何か」を考えながら、衣料支援、自立支援、難民雇用を柱に、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)をはじめとする組織と手をたずさえて、お客様の力添えを得ながら、様々な事業に取り組んでいます。

過酷な状況におかれた難民の暮らしの質を高め、働く環境を整え、難民とともに働くことが可能になれば、世界がより良い方向に動きだすはず。私たちはそのように考えています。より良い方向に動きだせば、世界の未来と、その持続可能性＝サステナビリティにも貢献することができるのではないか。難民の未来は、私たちの未来でもあるのです。

私たちはこれからも、お客様とともに、一歩ずつ、前へ進んでいきたいと考えています。ひきつづきまして、みなさまのご支援とご協力をお願いいたします。

<https://www.uniqlo.com/jp/sustainability/>

ユニクロのサステナビリティをめぐる活動について、さらに詳しく。

ユニクロ サステナビリティ 検索





「服のチカラ 18」参考文献 一覧

EU・トルコの難民政策合意—その背景と進捗状況（駐日欧州連合代表部）

<http://eumag.jp/behind/d0716/>

外国人労働者受入政策 ドイツの移民政策と新移民法（独立行政法人労働政策研究・研修機構）

http://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2004_11/germany_01.html

時論公論 「急増する難民 世界は何ができるのか」（NHK 解説委員室）

<http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/227488.html>

—シリア—危機にある子どもたち、戦争や迫害に多くの子どもたちが巻き込まれています。（国連UNHCR協会）

[https://www.japanforunhcr.org/lp/syriachildren?](https://www.japanforunhcr.org/lp/syriachildren?utm_source=google&utm_medium=cpc&utm_campaign=JA_JA_UNHCR_Generic_G09_syria)

[utm_source=google&utm_medium=cpc&utm_campaign=JA_JA_UNHCR_Generic_G09_syria](https://www.japanforunhcr.org/lp/refugee_children)

https://www.japanforunhcr.org/lp/refugee_children

世界遺産の市場、戦闘で焼ける シリア・アレッポ（AFPBB News）

<http://www.afpbb.com/articles/-/2904816?pid=9610834>

爪をはがし鉄パイプで殴打…シリア内戦で子どもへの人権侵害が深刻（東亜日報）

<http://japanese.donga.com/List/3/all/27/423968/1>

ドイツにおける条約難民及び庇護申請者等 に対する支援状況調査報告（（財）アジア福祉教育財団 難民事業本部）

<http://www.rhk.gr.jp/japanese/hotnews/data/pdf/wha0819.pdf>

ドイツの難民受け入れ数は世界2位 国連発表（ニュースダイジェスト）

<http://www.newsdigest.de/newsde/news/news/7891-2016-06-30.html>

ドイツはなぜ難民を受け入れるのか？政治的リーダーシップと強靱な市民社会（認定NPO法人 難民支援協会）

<https://www.refugee.or.jp/jar/report/2016/08/26-0000.shtml>

なぜ、ドイツはシリア難民を受け入れるのか？（ドイツBizGuide）

<http://bizguide.jp/de/article/syrian-refugee-003854/>

2014年のドイツ移民人口、過去最高の1100万人＝連邦統計局（ロイター日本語ニュース）

<http://jp.reuters.com/article/ger-idJPKCN0Q90KB20150804>

バルカンルート閉鎖半年 難民あふれる島 劣悪な収容環境（毎日新聞）

<http://mainichi.jp/articles/20161016/k00/00m/030/126000c>

メルケル独首相はなぜ受け入れを決めたか（WEBRONZA）

<http://webronza.asahi.com/politics/articles/2015092000005.html>